

アメリカ



ノーマン・デロ・ジョイ
オ&アリッシュ号
©Kit Houghton

オリリンピック 馬術の歴史

弊誌連載執筆のマックス・E・アマン氏がアメリカ馬術の歴史を概括する。
text: Max E. Ammann

アメリカの3つの町がそれぞれ
最初にホースショーを催した
ことを主張している。ヴァージニア
州のアッパーヴィル、コネティカッ
ト州のレイクフィールド、マサチュ
ーセツのスプリングフィールド。
話は19世紀の1850年代にさかの
ぼる。おそらくアッパーヴィルで
1853年に開催されたのが最古の
ショーという説が最有力だ。この時
期のショーで現在のオリリンピックで
競われる3競技が行われたとは考え
にくい。おそらくアメリカも当時の
ヨーロッパ同様、見せるためのショ
ーであり、馬の美しさ、歩様、マナ
ーを競い合ったものと思われる。

障害飛越が行われるようになって
したのは1860年代から70年代の
ことだ。90年ごろまで競技会はほ
とんどが東海岸で開催され、次の
6つの競技が行われていた。それ
は1. ハイジャンプ、2. ロング
ジャンプ、3. タッチ・アンド・
アウト、4. ノックダウン・ランド・
アウト、5. スピード・コンペテ

イション、6. ステークだ。

中でもハイジャンプがもつとも
人気があった。タッチ・アンド・
アウトとは障害物に触れると負けと
なり、1960年代まで人気があつ
た。ステークは今日のグランプリに
あたるが違いは参加費を払い出場
し、優勝者はそれを得ることができ
るが、現在のグランプリは主催者か
ら賞金が出ていることだ。

アッパーヴィルの競技会から30
年後の1883年、最初のナシヨ
ナル・ホースショーがニューヨ
ークで開かれた。このショーは
100年を経てアメリカでもつと
も権威のある競技会となつていく。

この競技会には後にCSIIOニュー
ヨークとも呼ばれFIEI公認の競
技会としてマディソン・スクエア・
ガーデンで4回続けて開催された
ことがある。

第1次世界大戦が始まるまでハイ
ジャンプはナシヨナル・ホースショ
ーのメイン競技だった。1883年
に183センチが最高記録だった

が、翌年198センチで、88年まで
に208センチ、91年には216セ
ンチの記録が生まれた。

1902年、ヴァージニア州リ
ッチモンド大会ではヒーターブル
ームというサラブレッドが240
センチの世界記録を樹立したが、
ヨーロッパはこの記録を完全に無
視した。同じ年、イタリアのター
リンの競技会で偉大なるフェデリ
コ・カプリリーがハイジャンプで
208センチの記録で優勝した。

21年にFIEIが創設された時この
記録が最初の世界記録として記録
された。30年代になって、やつと
ヒーターブルームの02年の記録を
超えるヨーロッパの馬が現れた。

しかし、アメリカでは12年にカナダ
人の持つコンフィデンスがオタワで
245センチの記録を出している。
さらに23年にはアメリカで究極の記
録といわれる246センチをグレー
トハートが確立した。しかし、この
頃にはすでにハイジャンプへの関心
がほとんど冷めていた。

ナシヨナル・ホースショーは09
年にニューヨークで開催され、こ
の時までに完全に市民が主催する
イベントとなり、初めて軍隊の馬
を招いた年として記録に残る。ア
メリカのフォートリレイの騎馬隊、
フォートブラッグの騎馬砲兵隊の
みならず、ヨーロッパから将校も
招いた。11年、最初のネーション
ズカップがマディソン・スクエア・
ガーデンで開催され、オランダが
優勝した。その後、アメリカは31
年に初めて優勝を経験することに
なる。29年から32年までガーデン
でCSIIOが開催されるとともに、
ニューヨークとカナダのトロント

の共催で北アメリカフオール・サ
ーキットが催された。

20年から40年の間にマディソン・
スクエア・ガーデンのナシヨナル・
ホースショーはニューヨークの重
要な社交行事となつていった。この
ナシヨナルについての記事は内容
いかに関わらず、ニューヨーク
タイムズのスポーツ欄ではなく社
交欄かローカル欄に掲載された。
こうした慣習は20世紀も後半にな
つてからやつと改められるようにな
つた。アッパーヴィルの競技会
を含めアメリカの屋外のホースシ
ョーは馬術界内部での出来事とし
て一般市民からは完全に無視され
ていた。この頃にエンタテインメ
ントとしてスポーツが人気を集めた
競技は野球、フットボール、ゴルフ、
テニス、競馬などである。

この時期のアメリカでは馬場馬術
の大会や総合馬術などの競技会は皆
無だった。唯一、カンザス州フォ
ートリレイにある騎馬兵のための学校
が馬場馬術や総合馬術に興味を示し
た。それも、オリリンピックに出場す
るような選手に限られていた。

オリリンピック出場の始まり

アメリカは12年、ストックホル
ムで開かれた最初のオリリンピック
の馬術競技に軍隊から4人のライ
ダーを出場させた。後のアメリカ
騎兵隊長であり、FIEIの会長と
なるガイ・ヘンリーがチームを束
ね、総合馬術で銅メダルを獲得す
るとともに、障害飛越のネーショ
ンズカップで4位となった。20年
のアントワープオリリンピックでも
アメリカは優れたライダーが率い
た。後にアメリカの騎馬隊の馬術

ロサンゼルスオリリンピック(1984)で優勝した障害チーム。
左からジョー・ファルギス、レスリー・ブル、コンラッド・
ホルムフェルド、メラニー・スミス。 ©Kit Houghton



教本を著すハリー・D・チャムバ
ーリンだ。彼の3度目のオリリンピ
ックである32年のロサンゼルス大
会で彼は障害で個人銀メダル、総
合のチームで金メダルを獲得した。

しかし、次のアントワープ大会で
はひとつのメダルも獲得できなかつ
た。4年後のパリ大会で、スロ
ーン・ドークは総合馬術で3位に
つけた。28年のアムステルダムで
も無冠に終わる。この4回のオリ
リンピックまでアメリカの将校たち
は馬場馬術のトレーニングを一切
していなかった。32年の自国での
オリリンピックを機にこれが大きく
変わった。

騎馬隊、騎馬砲兵の数名の将校
が選ばれ馬場馬術を特訓した。こ
の努力は報われる。ロサンゼルス
大会でヒラム・タートルは個人の
銅メダルを、そしてチームも銅メ
ダルを獲得する。ただし、疑わ
しいジャッジのおかげではあつた
が、ジェニー・キャップのオール・
E・トムソンは総合で銀メダルを

estrian Sport in the U.S.A

獲得。さらに4年後のベルリンでも同じメダルを得た。アメリカの総合チームは金メダルを獲得した。36年のベルリンではトムソン以外はどれもメダルを獲得できなかった。

48年はアメリカ軍がオリンピックに参加した最後の機会になった。第2次世界大戦でアメリカの騎馬隊は廃止され、46年にロンドンオリンピックのために一度だけ馬術チームが再結成された。まずチームの12人がフォートリレイでトレーニングし、47年にヨーロッパに移動した。翌年のロンドンではアメリカ生まれの馬と戦果であるドイツの馬にまたがり競技に参加し、金1つ、銀2つのメダルを獲得した。

50年に市民組織、USET (United States Equestrian Team) が結成される。52年のヘルシンキにアメリカは一般市民が出場した。というものの、ジョン・ラッセル、ロバート・ボルグは軍の黒いコートを身につけ、馬も一部は軍の馬だった。68年に個人優勝を遂げることになるビル・ステインクラウスがこのときの牽引役を果たし、障害団体が銅メダルを獲得し、総合チームも銅メダルを得た。

この市民組織からの出場者は56年には惨敗した。そこでハンガリーの障害選手、ベルタラン・ドゥ・ネムシーを障害のコーチとして招き、61年にニュージャージー州のグラッドストーンに広々としたトレーニングセンターが建てられ、その後アメリカの障害は世界に伍する存在に育つ。バート・ドゥ・ネメシーの指導で50年代の終わりには並ぶものがない強力な布陣ができあがる。ビル・ステインクラウス、ヒュー・ウイレイ、フランク・チャボット、ジョージ・モリスの面々だ。60年前半にウイレイとモリスが引退すると、メアリー・マイアーズとキャシー・クスネルというふたりの女性が入り、数年の間、ふたたびスーパーチームが結成された。

60年のローマオリンピックでこの障害チームは銀メダルを獲得。64年の東京では幸運に見放され、ステインクラウスの馬、シンジョンが怪我をし、メアリー・マイアーズのトムボーイが不振で、6位に落ち込んだ。しかし、68年にはビル・ステインクラウスは個人で金、72年にチームに銀をもたらした。

後発のドレツサーージュ

The History of the Equine

ドレツサーージュについては50年代に入り、興味を持つ人が増えてきた。48年に4位に入賞した軍のライダーロバート・ボルグの影響や、ドイツから招いたりチャード・ヴァートジェンやフリッツ・ステコソソといったトップトレーナーの存在があるにもかかわらずアメリカのドレツサーージュには勢いがなかった。アメリカではドレツサーージュの競技会がほとんど行われず他国との距離があまりに大きかったのだ。実際C D Iがアメリカで初めて開催されたのは70年代になってから。ジェシカ・ニューベリー、現在のランズハウス、トリシユ・ガルヴィン、現在はテラ・トゥール・ドゥーヴェルニユ、のふたりははじめに一般市民として悪くない成績を残した。トリシユは60年のオリンピックで6位、64年には8位に入賞する。アメリカドレツサーージュチームは68年に8位、72年に9位につけた。76年のモントリオールで銅メダルを獲得したときは驚きもつて迎えられた。

総合馬術は障害と並ぶ実績を残した。64年、68年、72年と総合チームは続けて銀メダルを獲得した。76年にはついに優勝を成し遂げる。個人でもメダルを獲得している。68年にはマイケル・ページが銅、76年にはデッド・コフィンとマイケル・ブラムが金銀を獲得、さらにブルース・デイヴィッドソンは74年、78年と世界チャンピオンのタイトルを得た。これは70年にUSETが招いたフランス人コーチ、ジャック・ル・ゴフの力が大きい。障害に戻ると、60年代後半にUSETとバート・ドゥ・ネメシ

ーは新たな才能の発掘のためのプランを進めた。オリンピック開催の翌年からアメリカ全土の競技会から選んだ若い選手をグラッドストーンに送りこんだのだ。70年にはジョー・ワールギス、コンラッド・ホームフェルド、ロバート・リチャード、そしてステイブ・ステファンが選出され、74年にはマイケル・マッツ、メラニー・スミスとバディ・ブラウンが選ばれた。

76年にはこうして選ばれた者がオリンピックチームの一員となっていた。ブラウン・メッツ、リドランドの3人だ。80年はモスクワオリンピックのボイコットが起ったが、84年には満を持した陣営を送る。その結果、ジョー・ワールギスとコンラッド・ホームフェルドが1、2位となり、メラニー・スミスとレジー・ブルととも

にチームで金メダルを獲得した。88年のソウルでは、フランク・チャボットの教え子のグレッグ・ベアストはジュエツイストに騎乗し、個人、チームとも銀メダルを獲得し、92年にはノーマン・デロ・ジョイオが銅メダルを得た。

96年はアメリカ・アトランタがオリンピックの会場となりUSETチームは銀メダルを獲得した。しかし、2000年のシドニーではアメリカはひとつのメダルも獲得できなかった。ところが04年、08年にはチームで金メダルを連続して獲得した。ビジー・マッデンとマクレーン・ワードは両方のオリンピックに出場した。クリス・カップラは04年のメンパーで個人で銀メダルを獲得している。

近年の総合馬術

ドレツサーージュでは85年に始まったドレツサーージュのワールドカップの創設にあたり、アメリカは大国として尽力した。そのおかげでアメリカの選手は世界レベルの大会出場する機会を得られ、その出場者はアメリカドレツサーージュ界のシンボルとみなされるようになる。ロバート・ドゥヴァーは84年から04年まで6頭の馬と6回のオリンピックに出場した。彼は92年、96年、2000年、04年とアメリカチームの銅メダル獲得の牽引役を務めた。彼を取り巻く才能ある人馬は、キーン騎乗のヒルダ・ガーニー、エクストラオーデイナー・ギブソン、ラヴェル騎乗のマイケル・ギブソン、ラヴェル騎乗のステファン・ピーター、ブレンティナー騎乗のデヴィー・マクドナルドだ。

総合では76年のモントリオールで個人団体とも金メダルを受賞した後は、84年のロサンゼルスで団体金を獲得するが個人はカレン・ステイブスの銀メダルのみだった。88年から92年にかけてはUSETにとつてほとんど成果がない期間だった。96年から運が上向き。96年のアトランタではケリー・ミリンが個人で銅を獲得、そしてチームは銀を得た。シドニーではデイヴィッド・オコナーがオリンピックチャンピオンとなる。チームとしても銅メダルを獲得、これは04年のアテネでも引き継ぎ、チームで銅を得た。この時、個人としてはキンベリー・セヴァーンが銀メダルを獲得し、次の08年の北京でジーナ・マイルズが銀メダルを受賞した。



シドニーオリンピック(2000)で金メダルを獲得した総合のデイヴィッド・オコナー&カスタムメイド号。
©Kit Houghton

北京オリンピックの障害チーム
©Kit Houghton